

妙な音

空っぽだと思つた箱だけど
振ってみると妙な音がした

人のささやき

人のうめきこえ

人のうた

雨

生暖かい風が

雨の匂いをはこんでくる

不吉な音をたてて

雨が

樋をしたらたりおちる

刃の光

虎のようなものが
錆びたトタン屋根のうえを這っている
何を嗅ぎつけたか知らぬが

目は

刃の光

闇

蛍光灯の下 光に手をかざす
まぶしさの中に手は引きこまれ
ずるずると引きこまれ 私はきえてしまう

闇をあるく

遠くに光の粒 足を速める

粒は大きくなる 手をのばす

粒は もっと もっと 大きくなり 私のからだをつつみこむ

光の中に

とけこむと闇があった

闇をあるく

しらない

一

光をまとった森の精が、
木の切り株に腰をかけて、待っている。

ある日、街を歩いていると、めまいがした。
ふらり、ふらりしていると、わたしを呼ぶ声が、かすかにした。

二

きょうは、何月の何日か、しらない。
わたしは切り株に腰をかけている。

雨が降っている

そこには銀色の雨が

さらさらと降っている

うつすらとにじんだ太陽が

空そらのまんなかにかんている

ほかには何も無い

わたしが立っているはずの大地はなく

足の下には さらさらと 雨が降っている

宿す

産み落とすことのないものを宿す
奴は美と神秘をくれるかわりにわたしの体内をむさぼり とぐるを巻く
奴の生臭い吐息はわたしを溶かし飲み尽くす

人形

細い枯れ枝のさきに
首をくくった人形が垂れさがっている
くもの糸よりもほそく鋭いものが
白い肉に食い込んでいる
人形はおんな
まだ生きている
目には涙
口もとには赤い血が
ほんの少し糸をひいている

鏡の天ぷら

フライパンの上で、人見知りの鏡の天ぷらを揚げました。
わたしは涙の連絡船を口笛で吹きながら、
ぱっくりと口をあけたロールパンに、
ジャムとソーセイジと揚げ鏡を投げ込んで食べるのです。

厨房に吊り下げたシャンドリアは、
太陽を気取ってわたしの背中に降り注ぎ、
上着にこびりついた馬糞の上の蠅は難産で玉の汗。

黄金のキラメキは、こたつ板の上を這う三葉虫の目をくらませ、
彼は井ぶり鉢の日陰に逃げ込もうともがくのですが、
力みすぎて糞を漏らしてしまふ。
晴れの舞台での、そそくに気が動転して、

ますますもがくのだが、ただただ、汚物にまみれるばかり。
なすすべもなく地層の彼方に沈んでいく。

座布団に正座して、
ジャムとソーセイジと揚げ鏡のロールパンにぱくつく。
どうしても揚げ鏡だけが残ってしまう。

しかたがないので、
鏡の天ぶらを箸ではさんで醤油に付けてひと噛みする。
黄色のコロモは剥げて落ち、鏡の破片が歯茎に突き刺さったような。
油でべとついた鏡を手にとって、
わたしは、キャツ、と悲鳴をあげてしまった。

口のまわりを紅い血で塗りたくった異星人が、
わたしをのぞき込んで、お化粧。

人見知りのわたしが、人見知りの鏡に映った異星人に笑いかけた。

鏡にくっついていたコロモの残りかすが、
黄色い油の糸をひきながら鏡の上をすべって落ちた。
なんときたない涙でせう。